

私の学生時代 3

大学院生の頃

三木 良一
昭和 25 年 3 月学部卒業

1 当時の大学院制度

前に書きましたように、私は昭和 22 年 4 月（1947 年 4 月）に京都帝国大学に入学し、昭和 25 年 3 月（1950 年 3 月）京都大学を卒業しました。続いて大学院に進みました。

学部の時は、入学許可証や身分証明書がありました。大学院生としては特別の辞令的なものは無かったです。代わりに、学費として大学にお金を納める必要はありませんでした。大学院生としては、私のように特別研究生として給費と結びついた者と、就職は一般にしているけれど、ある先生のところのセミナーに参加している者もいました。就職している者中には、これは教室によるらしいですけど、それは多分子算の関係でしょう、学割まで使えた人が居るんです。学割がどの程度の人に出たかははっきりとは知りませんが、私の知っている例として、化学の人で熊本大学に就職した奴が、夏に実験のために京都に出てくるときに学割を使っておりました。

数学でいえば、柳生君、後に同志社で教授になった守本君、斎ノ内君達は全員大阪府大の助手だったんです、少なくとも一、二年間は。それから大塚香代さんも最初の数年は同志社中学の教員だったんです。大塚香代さんの旦那さんは関西医大の助教授かなんかだった。こういった連中はセミナーに属していて、自分達は大学院生であると認識していたのです。

まあ、そういう状況で、とにかく大学院生の外縁はハッキリしてはいなかったです。

2 大学院生への奨学金

私は特別研究生として奨学金を貰いました。特別研究生の奨学金は、専任の一ヶ月分くらいは有ったように思います。特別研究生を最後に辞める時は 7000 何ぼでした。その時の勤めている方の給料はどの位だったか憶えてはいないんです。後年、私が Boursier¹としてフランスに行っていたとき、丁度藤家君（藤家龍雄氏）が立命の専任であった時期でして、彼は僕の後組合の係りをやってくれていました。彼から Paris へ手紙が来て「今年の冬のボーナスが初めて 1 万円を越しました、羨ましいか」というような手紙が来たのを憶えています。ひっとすると 1 万ではなく 5 万だったかも知れませんが、いずれにしても一桁の万でありましたから、これと比較すると、特別研究生の奨学金は悪くはなかったことが分かります。

ただ前期 2 年と後期 3 年で特別研究生の定員は減りました。また立命館に行くと、文学部や法学部の特研生がゴロゴロしていました。特別研究生になるための競争といって

¹フランス政府給費留学生

も、試験一つ有ったわけではなく、指導教授の腕前でしょうね、これは、後期での特別研究生は、理学部では物理の山崎和夫君と僕だけでした。前期は各教室に少なくとも一人ずつ位はいたと思います。

私の一つ下の大田実君は学術振興会というのかな、その奨学生でした。私達は「学振、学振」といってました。

西田君は、卒業した25年には名古屋大学の伊藤清先生のところへ行っていました。その翌年に伊藤先生が京都大学に来られる予定は決まっていたと思います。京都から名古屋に通ったのか、名古屋に下宿してたのか思い出せませんが、彼はいわゆる給料を貰うような就職はしてないし、学振の奨学金も貰ってなかったです。

特別研究生の制度は、上の方の学年はどうなっていたのかは良く分かりませんが、少なくとも楠先生の学年、私たちより二年上の学年では特研生はいました。私より一年上の学年がなれたかどうかは、はっきりとは思い出せませんが、その次の学年の私がなれたわけだから、特別研究生の制度は有ったんでしょう。数学の大学院生が特別研究生になれたかどうかは分かりませんが、学部全体ではその制度はあったわけです。

楠さんの学年の人はひょっとしたら給費であるかも知れません。溝畑、山口さんの学年の特研生は給費だったのです。すなわち返す必要は無かったんです。しかし、僕等の時は貸費だったんです。返すという条件付の奨学金だったのです。

私より下にどこまで特研生がいたのかが分からないのです。例えば新制一期生の良くできた松村さんとか、藤家さんとかはどうも貰った気配がないのです。旧制の二つ下、23年、24年、25年までは、同志社に就職した松井さんの学年までは、数学で居たかどうかは知りませんが、特研の制度はあったと思います。いわゆる旧制大学の時代ですから。ただ、その方達が僕等と同じように後期を終えるまで、即ち28年まで特研生であったかどうかは分かりません。下手すると前期だけで奨学金が終わり、その後は切られたかも知れません。新制用の奨学金に変わったかも知れません。

3 大臣交渉に行く

先にも言いましたように、溝畑、山口さんの学年は特研生の奨学金は給費だったのです。しかし、僕等の時は貸費だった、即ち後で返還するという条件付だったのです。

それで、奨学金を元のように給費に戻させるために、文部省に大臣交渉をしに東京へ行った覚えがあります。法学部に三高の時の友達で乾昭三という男がいました。彼は末川先生の愛弟子で、後に立命館の教授になり、また所謂「末川六法」の編纂に協力しました。立命館を退いた後に京都府の教育委員長もやった男です。その乾と私の二人で夜汽車で文部省交渉をやりに行きました。当時の文部大臣が天野貞祐とかとてつもない偉い人でした。しかし、行ってみると局長位にあしらわれて、我々二人は尻尾を巻いて帰ってきた記憶があります。

京都大学からの代表の二人の内の一として、私が大変交渉に行ったというと、私が京都大学の大学院生の組織を牛耳ったように思われるかも知れませんが、そうではありません。当時は、各大学に特研会という制度が有りまして、その会の主力は法学部や経済学部の連中だったのです。会を牛耳っている彼らが私達に「東京へ行ってこい」と言うので、行ったわけです。

4 奨学金の返済免除

奨学金の返済に関して、いくつかの決められた職業に就けば返済は免除される、という制度がありました。しかしこの制度が複雑でした。

学部の奨学金に関しては、返還を免除される職業として義務教育、および高校教育までに限られていました。また免除されるためにそこで働かねばならない期間は、およそは借りた年限の3倍でした。毎年だったか、あるいは2年か3年に一度か勤め先から就職証明とか、在職証明を書いてもらい提出しなければなりませんでした。

逆に特別研究生の奨学金返還免除の為には、大学などに勤めなければならず、高等学校に勤めていたのでは駄目なんです。学部と特別研究生の奨学金の免除条件は違うのです。私の場合は、学部では三回生の後半しかもらえませんでした。私は義務教育のレベルの職場には就職してませんから、三回生の後半の部分は返しました。大学院の特別研究生でありながら返済しましたが、半年分の奨学金ですから知れています。

大学院での奨学金の返済免除に関しては、対象となる職業が一々列挙されていて、大学の固定的な研究職、それから統計数理研とか物理の人には理研とか、そういったものが細かく指定されていました。そういうところに就職し、かつ2年か3年に一回勤務先から在職証明を貰って提出しなければなりませんでした。この様な者達が出会うと「芸者並みにまだ年季が明けてない」などと話してました。

私の場合は、大学院を終わって立命に就職してから、五年の三倍十五年は、在職証明を3年に一回くらい出してました。そうしていた人が立命館大学にも何人もいました。もし大学を変ると、その都度変った先で在職証明を頼まなければならなかったのです。そういうわけで、物理に居た山崎君とは15年を終わった時、「やっと15年で年季が明けたあ」と言いあいました。

5 特別研究生の生活



小堀 憲 教授

特別研究生であることの義務は一切有りませんでした。責任があるとすれば、それは指導教授の方にでしょうね。もつとも、指導教授が報告書を書いて下さっていたかどうかは分かりません。

特に私が特別研究生になった時の辞令が「松本敏三と小堀憲の指導を受けること」となっていました。だから指導教授が松本敏三先生と小堀先生のお二人でした。その後2年目、3年目からは小堀先生お一人の名前で辞令が来てたかどうかはもう憶えていません。小堀先生が教授になられたのは、講座としては岡村先生の後ですが、岡村先生が亡くなられたのは23年の夏です。正式の記録ではひょっとしたら、24年かもしれません。それで松本先生のご定年とダブルのではなかったかと思えます。そのように松本先生

と小堀先生の連名で指導教授となっていたからには、岡村先生の後、小堀先生が教授になられていて、かつ松本先生は第一講座の教授としておられた時期があったのかも知れません。この時代は、定年退職の日が誕生日でしたから、その重なった期間の長さは

松本先生の誕生日に依ることになります。²

少々横道に逸れますが、教授の誕生日での定年退官に関わる私の思い出を一つ述べましょう。私は一回生の物理学通論の成績を受教簿に書いて貰う³のを放つといたんです。先輩が卒業までに貰えばいいんだからと言うものですから、ところが荒勝文策先生⁴が我々の一回生の終わりに定年になられるというので、「今貰いに行つて置かないとアカンぞ」と言われて、物理学通論の成績を受教簿に書いて貰いに物理学教室へ行った覚えがあります。私が荒勝先生の部屋を訪ねたとき、先生は一生懸命部屋を片づけておられ、「はよこんか!」と怒られました。荒勝先生は皆「優」やというので、誰も貰いに行つてないのです。荒勝先生のお誕生日は何時だったか知りませんが、ともかく年度途中でのご退官でした。

6 図書室のこと

我々の頃は、図書室の職員として助手の身分の人が一人居られました。大同さんといわれました。事務官である助手と教官である助手とが有つたわけです。そして事務官である助手はこの上（現在の305号室）に居られました。我々は誰が助手で、誰が副手か分かりませんでした。怖い人はこの上にいる助手の大同さんだけでした。その他にご夫人が居られなしたが、そのご夫人は亡くなった方の、あるいは辞められた方のご家族とのことでした。

階段を上がったところ辺に広い部屋が有りましたが、私は卒業試問はその部屋で受けました。2回目の記事に書きましたように、控え室は3階の図書室で、試問のあとはその控え室へは帰れませんでした。大同さんの後任者が松谷さんという方でしたが、大同さんも松谷さんのどちらも怖かったです。

ついでに、卒業試問を受けた時のことを述べましょう。私の卒業試問はすこぶるレベルの低いのんびりしたものした。脅かされたこともあれば、先生方からかわれたりもしました。私は蟹谷先生から「スキュウな3直線に同時に交わる直線の作る線織面は知つとるか?」と訊かれました。当然線織面ですから、「それは一葉双曲面か二葉双曲面です」と答えました。そしたら「じゃ、どういう場合に一葉双曲面で、どういう場合に二葉双曲面になるか?」と蟹谷先生が訊かれた。私も怖いもん知らずで、「どういう場合にどうなり、どういう場合にどうなるかは分かりませんが、始めのスキュウな3直線の方程式に基づいてその曲面の方程式を作つて、2次曲面の分類に掛けたらできます」と言いました。そしたら、「えらい面倒くさいことを言うのやなあ」と言われたので、私は「面倒くさいかどうか知りませんが、そうすれば出来ることだけは確かです」と言うと、「えらい自信たつぷりやなあ」と冷かされたのですが、小堀先生横でヒヤヒヤして居られました。大体は、大学院で代数を希望した人は代数の事をという風に質問がありましたが、私は特に2次曲面とは関係なかったのですが。

話を図書室に戻します。私達の頃にはブロックというものがありました。それは大

²昭和25年(1950年)、昭和26年、昭和27年の京大職員名簿には松本先生が第三講座担当、小堀先生が第一講座担当となっている。昭和28年の名簿には松本先生の名は無い。伊藤清先生の名は、昭和27年の名簿には載っている。

³当時は、学生夫々が受教簿をもって、試験に合格すると、その先生の部屋を訪ねて成績を記入してもらった。卒業等は受教簿に記入された科目に依つて判定された。

⁴荒勝先生は1890年3月25日生まれ。昭和25年(1950年)3月25日で京都帝国大学を定年退官。

体 B6 位の大きさの木の板で、図書室の本をどなたかが正式の手続きを経て借り出すと、その本が有った場所にブロックと呼ばれた木の板に借りた人の名を貼って、本が返却されるまで置いておくのです。

私が院生であったとき Goursat だったか、要するに Borel 叢書の何かを借りたいと思って探すと、その本は借りられていて、ブロックが置かれていたのです。ブロックにある借り出しの日付を見ると、その借りている人が随分長期間占有していることが分かりました。ですから、事務官の助手である大同さんか松谷さんに「早よう返してもろて下さい」と言ったら、えらいこと怒られてしまいました。正当なこと言うてるのに何で怒られなければならないのかと思いました。

その本を借り出しておられたのは児玉鹿三という元三高の幾何の先生でした。秋月さん、小堀さんや湯川さん達の三高の時の先生で、本当かどうか分からないのですが、湯川さんに欠点を付けたとかいうということで知られていた先生だったのです。その児玉先生は三高の先生の時は、三高の教員としてこの図書室から借りることができのでしょう。その時に借り出されて、そのままだったんです。私は三高生ではあったとはいえ、児玉先生はずっと昔の先生でしたから、どんな方か知りませんでした。図書室で「早よう返してくれるように言うて下さい」と言ったら、小堀先生からもえらいこと怒られて、「児玉さんの怖いこと知らんなあ!」と言われました。先にも触れたように小堀先生も教えてもらった方でした。えらい頭の固い人で、新しい数学をご存知ならない藤原松三郎時代の先生ででしょう。恐らく、湯川さんに欠点を付けたと言うことでしたが、岡潔さんにはどうだったか知りませんが、岡さんも習ってるわけです。

それから後に、児玉先生と私の間に皮肉な因縁が出来たのです。その児玉先生が三高を退職した後、立命館大学に行ったのですが、何かのことで末川さん（当時の立命館の総長?）と大喧嘩してしまいました。そのため教授会で初めてという退任決議というのに引っかかって、追い出されてしまったという話を聞いております。その空いた枠で僕が採ってもらった、私は立命館大学での児玉先生の後任という因縁が出来ました。

7 大学院生室

この部屋（現 205 号室）は院生室でした。私が大学院に入った頃は、溝畑、山口、松阪、河合さんといった私より上の辺の方々は皆ここに居られたのです。



左より 前列：井村，三木，中井， 後列： 楠，滝沢，溝畑
場所：現在の 3 号館 205 号室，撮影：1951 年 11 月

昭和 25 年の職員録では、秋月先生が第四講座担当教授となっていますので、秋月先生は園先生ご退官の後を継いで代数の教授になられて間もない頃ではなかったかと思えます。教授になられるまえは秋月先生は三高の教授で、数学教室の講師でした。現在の事務室（101 号室）の所は、北側半分が事務室で、その次の個人割の最初のところが講師室となっていて、秋月先生はこの部屋を使っておられました。秋月先生が教授になられて、部屋を移られたそのあとに私と西田君が入りました。西田君は名古屋へ行く日以外はこっちへ来ますから、二人でこの部屋に入ったんです。すると秋月先生は「俺が居た名誉有る部屋やから汚すなや」と脅かされました。

8 就職するまで

私が院の 3 年か 4 年の時に、どなたが声をかけてくださったかは覚えていないのですが、「鹿児島大学に専任の口があるから、行かないか」と言われたことがあるんです。その時に、余りにも遠いからと言って辞退しました。結局は微分幾何の、今ではもう定年になられたはずですが、藤谷さん、藤家さんの、あの学年のどなたかが行かれたんです。その次に「教育大へいかないか」と言われました。教育大は受け入れの方向で動きかけていたんですが、そうこうしている内に、立命館大学からも先に書いたような経緯で、私に声が掛かりました。立命館大学には理工学部数学物理学数学学科があるから立命館大学の方を選びました。

教育大には楠先生の同学年の坂下さんが居られて、それから新制の一期の方か、二期の方が行かれました。また、鹿児島大学へは幾何の橋口正夫さんが行きました。後年、鹿児島大学でシンポジウムがあったときは、その世話役やって下さっておりました。

9 海賊版

昨年（2016 年）11 月 19 日の同窓会の講演で、広中平祐さんは「秋月先生は扉が開かないと蹴り飛ばして入るような怖い先生だった」と言われましたが、私に対してはそう怖くはありませんでした。その理由の一つは、私は京大数学教室での海賊版の世話係で、秋月先生はその私から海賊版を買っていた時代ですから、私に対してはあんまり威張れない状況だったのです。更に、Hodge という人の Theory and applications of harmonic integrals という本を秋月先生自身が勧進元になって海賊版を京大から出したんです。実際の仕事は中野さんで、2 冊に分けたんかなあ、薄い全書版くらいの小さい本でした。それが京大として扱った唯一の海賊版だと思います。



秋月 康夫 教授

序でに言いますと、私が海賊版を扱うようになったのは森の責任なのです。森毅と東大の数学での同期に、座間という人がいて、彼が出版業者と協力して一手に海賊版の元締めをやっていました。全国の大学に売りつける為の窓口として、それぞれの大学に縁者を探していました。森毅が京都には知ってる奴がいると言って私を紹介したので、座間から私に京大での窓口になれと言うてきた訳です。

出版されている海賊版を教室の人々に周知するために、掲示板に広告を貼りだしました。掲示板というのも、あの及落のどる掲示板です。これは空いていることが多いのです。海賊版の情報が送られてくると、私とその掲示板に「こういう本が出来ました」との広告を貼っていたのです。そしたら大同さんに呼びつけられて、「こんな所に勝手に掲示をだすな」と怒られました。さらには、「研究室を使って金儲けをすることは何事か!」とも怒られました。実際は教室の先生方が皆海賊版を買っておられました。あの頃、チャントした本は高くて、先生方といえども手に入れることは難しかったのです。

我々の扱った海賊版を作るための元の本すら、本物ではなくて、所謂上海版だったのです。だから、我々が売っていたのは「海賊版の海賊版」ということになります。座間が“通称上海版”をどっからか手に入れて、それを元に上海版の海賊版をつくっていたのです。東大を軸として作っていたのですが、ある程度の数を作りかつ売らないとこの仕事は成り立ちませんから、各大学に連絡をつけて、販売網を構築していた訳です。

流石に図書室には海賊版は入っていません。先生方が個人で海賊版を持っていました。私は窓口をやっていた関係上、どの先生が払いが悪いのかもハッキリ分かりました。また、院生には札付きの払いの悪い奴も居て色々と苦勞しました。

私が、卒業研究一年目、昭和25年度から使ったWeylのDie Idee der Riemannschen Flächeも上海版ではなく座間の海賊版です。小堀先生以下全員海賊版でやりました。代数のvan der Waerdenも海賊版になってました。ただその海賊版はずっと早くからあったので、あれはひょっとしたら上海版の別版だったかも知れません。

我々が三回生のとき、van der WaerdenのModerne Algebraの海賊版のことを誰かが教えてくれて、これを手に入れてセミナーをやろうということになり、私が秋月先生に「部屋貸してください」とお願いに行きました。我々の予想に反して、秋月先生に怒られて、「学生だけで本を読むことは禁ずる」と言われました。つまりいい加減な勉強をして、何が正しいかが分からんようなことになるのは良くない、ということなのでしょう。「勝手にやるのはいかん、部屋の使用許可は出さん」と言われました。

まあ、下宿持ち回りでもやれということでしょうね。そういえば教室に空いてる部屋はなかったかもしれません。助手の方々も二人一部屋でしたから。

勉強をするための本は概ね海賊版という状況でした。例外は、この前回にも書きましたが、蟹谷先生の講義のプリントがありました。蟹谷先生の講義が余りに難しいから、先生にノート借りて吉田神社の前のプリント屋へ持って行き、謄写印刷にしてクラスに配りました。射影幾何学特論で、接続の話でした。海賊版以外といえばそれ位でしょうね。秋月先生は例のA. WeilのFoundation of geometric algebraを自慢しておられたけど⁵、流石にあれを教材にされることは無かったんです。

10 友人たちとの勉強のことなど

10.1 三高時代の森毅との勉強

まず、大学院の時代の話ではなく、三高の時に友達とした勉強の事から始めます。私は三高では、勤労働員⁶で、現在はユニバーサルスタジオジャパンとなっている場所にあった工場へ行きました。しかし、工場には行っただけでも、私は現場では働かなくて良かった

⁵同窓会設立報告号78ページ参照

⁶準備号の楠先生の記事のなかに、勤労働員の経験が記されている。

たんです。“29 稀”⁷に書きましたけど、森毅と私と、教養部の物理にいた幡野という男、それから大学は美学に行ったという変った男の木幡の4人が現場には駆り出されず、研究班と称して特別の部屋で実験をしておりました。飛行機の桁を作り出す金属の塊、インゴットをどういう成分にしたらどういう桁材が出来るかを調べる仕事です。工場の専任職員であったか、あるいは技術将校かであった東大の航空学科を卒業した人の指導で明けても暮れても、ストップ・ウォッチを片手に持って実験をしておりました。

インゴットの成分をどう変えたら、出来る金属の強度等の特性がどなるかという計測をやるのです。実験の精度を上げるために、夜も勉強しておけというので、工場の寮のその4人の部屋だけは終夜明かりを付けていて良かったんです。

私がこの4人に入ったというのも、特別に成績が良かったというわけではないのです。三高には得意の自治組織があって、寮の行政を担っているメンバーが4人位居たのです。彼らは、私達にとっての本当のボスなのです。そのボス達というのは、後で法政の教授になりジャーナリズムでも有名になった男とか、英文の教授になった男がいました。行政のボスというのは文系の連中なのです。勤労働員に関わる工場との折衝もボス達がやるわけで、我々4人はそれらのボス達との関係で選ばれたのです。4人は一日中実験をしていて、消灯は無かったのです。それを良いことに森毅が「4人でセミナーをやるう」と言い出しました。彼の親父さんが沖電気だったかどこかの電気会社の重役でした、大学は何処であったかは知りませんが、工学部出身にも関わらずその親父さんが旧版の岩波講座の「数学」を持っていたんです。そして森が能代先生の書かれた集合論を持ってきました。森と私のほかは、一人は物理へ行き、もう一人は哲学へ行ったような奴ですから、本当に対応したのは二人だけでした。能代さんの集合論を森が全部チューターでやってくれたわけです。

10.2 戦後に森と Bourbaki を学ぶ

これは戦後に、森が北大へ助手になって行っていた頃の話です。彼は10月に石炭代を一年分もらい、そのお金を持って東京へ帰ってきました。北大では助手ですから勉強さえしていたら良い訳です。森と西田とは小学校の時一緒だったのです。西田は浪高に四修⁸で入っているのです。森は旧知の西田と私に目を付けて Bourbaki の勉強を持ちかけてきました。どこかに集まって Bourbaki を一緒に勉強しました。場所は思い出せませんが、三高の同窓会の部屋だったか、あるいはこの数学教室のどっかを使かったのかも知りません。このときの勉強について、森は後で、彼の沢山ある著書になかのどこかに書いておりました。それには、“これこれこういうことを始めたが、何ヶ月かで潰れた”という感じに書いてあり、如何にも西田と僕が勉強しなかつたと臭わせていますが、それは正しくないのです。僕は Bourbaki の Fonctions d'une variable réelle の勉強から随分と利益を得たのです。Boursier の試験を受けた時に、試験官であられた弥永先生の口頭試問が Fonctions d'une variable réelle に関するものだったのです。「それなら知ってるわい」というものでした。

⁷昭和29年3月の卒業生の会“ふくます会”の会誌。1999年に創刊号が発行され、15号まで毎年一号ずつ発行された

⁸旧制中学は就学期間は5年間であったが、4学年を終われば高校受験が出来た。

10.3 奥川先生のエピソード

森毅とは腐れ縁の仲でしたが、彼との関係で僕は数学へ行く決心が付いた面があります。しかし、次の話は森とは無関係のことです。

三高にいたころ、「数学研究会」と称する会を打ち上げました。そのときに小堀先生、秋月先生を頼って蟹谷先生から数学教室の二次曲面の模型を貸してもらい、2次曲面の分類的な話をさしてもらいました。これは戦後になってからです。この活動が僕が数学科へ進む一つの切っ掛けだったかとも思います。なにしろ当時の旧制高校で“数学科”のイメージは無いんです。昔は数学科には定員だけの学生はいなかったのです。数学科に進むのは余程の人だけでした。小堀先生、秋月先生は余程数学が好きだったのでしょう。図書室に関する話で触れた児玉先生は頭の固い人でしたから、児玉先生の影響で小堀さんや秋月さんが数学を選んだとは思えません。岡さんの影響かもしれない。岡先生に Goursat を教えたのは誰なののでしょうか、高木先生なのか、その辺は私には一寸分からないのです。

私に Goursat を勧めて下さったのは、奥川先生です。それに関わる面白いエピソードがあるので紹介しましょう。奥川先生は三高では、クラスの担任ではありませんでしたが、数学は習いました。どういう訳だったかは思い出せませんが、僕は奥川先生の所に良く出入りするようになりました。更に、三高を終え数学科に進学してからも奥川先生には一回生で立体解析幾何学のとその演習の両方を習いました。

奥川先生には数学研究会でも色々世話になりました。僕は数学へ行く決心してから、「どんな数学の本をよめば良いでしょうか」と訊いたら、Borel 叢書の話をして、それで Goursat だったか Julia だったかを勧められました。これに関連して奥川先生らしいエピソードがあります。私が先生のお家へ行った時、「君これ読んでみいへんか」と言われました。奥川先生ご自身もこの本で勉強されたと言われ、そして僕に「三木君、この本の何処とどこが面白いぞ」と話されながら先生ご自身の本を手渡してくださいました。悲しいかな、その本はフランス綴じでした。そのフランス綴じのページは未だ切られていませんでした。それで奥川先生真っ赤になられました。「俺が読んだから、貸してやる」と言われたのに、ページが切られてない本では、先生が読まれてはいないように見えます。先生が嘘をつかれた様に見えかねない場面で、奥川先生はお気の毒にも、如何にも先生らしく赤面せられて、「僕は教室のものを読んだから」とおっしゃられました。それは本当でしょう。先生は教室のものを読んで興味を持たれ、それでご自分で原本を手に入れられたばかりの所だったのです。